

過去十箇年

奈良女高師保姆 會澤タガエ

(此の一篇は、奈良女高師の「家事研究」の家庭教育號に掲載されたものです。幼稚園直接のこととして最も興味深く思ひますから轉載しました。記者)

私がこの奈良女子高等師範學校附屬幼稚園の保姆を拜命したのはつい昨日の様に思ふが早十ヶ年にもならふとしてゐる。十ヶ年かなりに長い年月ではあるが、しかし自分は決して長い感じはしない。中學校や女學校に通學の生徒方に禮をされては、其の人の幼少時を思ひ出して初めて長く此處に止まつて居る事を自覺するのである。さて其の長い年月の間何をして居つたか、ぼろ／＼懺悔を試みよう。

幼稚園保姆を希望した理由及保姆を拜命した其の當初

自分は幼小の頃から子供が好きであつた、またオタバコボン時代から一二歳の子供の泣くのを慰めた、子供はぢきに泣き止んだことを記憶して居る、小學校に入學し三四年頃から高等にかけて外遊時には、常にお人形事をして少しも倦まなかつた。

女學校に入學してからは日曜と云ふ日曜は、先生方の坊ちやん嬢ちやんを集めて自分は小さい先生と云ふ名のもとに、鬼事をしたり隠れん坊をしたり其の他いろ／＼の遊戯をした、自分も喜び、子供達も日曜の來るのを樂しんだ、かく子供達と遊び戯れて居る間に明治三十三年となつて上京する事になつた。上京後三ヶ年間は子供に接する機會が少なかつた、たゞ四年の敎生の方より其の方々の受持の子供の話聞き、時には自分が子供となつて談話を聞いたり、お唱歌を歌つたりする位のものであつた。愈自分が敎生になつて附屬に出る事になつた、女學校、小學校、幼稚園、何れから出るのかと心配して居つたが、自分は幼稚園から出る事になりしかも分園と云つた其の頃は、中以下の商人や勞働者の子女が來て居るので雨の降る日等は、車で登園するが、

其の車夫は父であつたり又兄であつたりと云ふ風であつた。しかし自分はこゝに配當せられた事を此上もなく喜んだ、朝は早くから出て行く午後も時間の許す限りはこゝにゐて先生から色々の教へを受け、日に／＼子供はなついてくれる、よく遊びが出来る様になる、興味はわいて来る、如何に寒い日でも戸外に出て遊ぶ、其の土産は耳殻邊に凍傷のあととなつて今尙残つて居る。外遊に於ける子供と自分の接觸はかく密接になつたのであるが元來氣弱な自分は腕白な男女兒を一まどめに保する事は出来なかつた、今から考へても恥かしい。時の定めにしたがつて次には小學校に移つたが割合に高年級高等科の一二年を男女合併で受つたので幼兒に接する其れとは幾分様子が異つた、しかし同一校内であるので小學校通ひの往復に幼兒と逢ふことを一の喜びにした。女學校の敎生も終りこゝに明治三十七年三月を迎へ四月にはお江戸の花を見ないで東都を去つた。さて奉職したのは海にも近く山にも近い勝地に建てられて師範であつた。幸此處には附屬幼稚園があつた、幼兒は僅か五十名計りであつたが自分にとつては此の上もない幸であつた、暇さへあれば出か

けていつて子供と遊んだ。時には談話もしてやつた、歌も共に歌つた、子供との接觸を可成多くして子供の上にいる／＼の研究をし様とした。しかし本職は保母でないのであるから時間も少なくて又幼兒との接觸も思ふ様には行かない。且いろ／＼疑問が出たので在職中夏休みを利用しては、各地に旅行して幼稚園を參觀し廻つた。勿論休み中であるので思ふ様には行かないが其までも東北地方信越地方等は七月初め授業があつたので便利であつた。子供の上には何か見出したいと餘暇をもつてはこんな事もして見たが、元來空纏の様な頭の持主である自分は心のみあせつて眞に何物も見出す事が出来なかつた。

大正二年七月病氣の爲歸省し靜養して居つた、丁度其の八月の事であつた、奈良女高師附屬幼稚園に保母一名缺員であると云ふので前主事雀部先生が一日私を訪ねてくれた、そして色々幼稚園のお話があつて希望ならば採用してもよいと迄云つて下さつた、其時は自分の病氣も全快に近づいて居たしかねて研究したいと思つて居る幼稚敎育の任に當る事でもあるし實にうれしく思つた「お差支なくば御使ひ下さい」と咽元迄は出たのであるが保母となるに

必要な條件を考へた時、どうしても口には出せなかつた。先生とお別れしてから色々に考へた、保姆となるに必要條件はいくらでもあるが先づ簡單に考へたゞけでも以下の六條件位は具備して居らなければならぬ。第一に健康兼體でなければならぬ、第二に感情圓滿であつて智徳兼備の者でなければならぬ。第三に特に兒童心理、生理衛生に通じて居らなければならぬ。第四に美貌の持主でなければならぬ。第五に幼兒に對する多くの經驗と理解とを持て居らなければならぬ。第六に眞に子供好きでなければならぬ。先づかきつけた六件の中第六項目が僅に自信あるのである、しかし實際幼兒に接し、幼兒教育について研究して見たいとは、かねてからの希望であるのでこの機を逸しては又さかゝる好機會は得られないと思つて實に貧弱な身をもつて先づ第六項をたよりに最善を盡す考で採用して頂く事となつた。大正二年九月よりいよ／＼保姆となつて小さい子供を相手にする事となつた。何分にも十年來も幼兒のみを相手にして居られた經驗たつぶりの先生のあとであつたので其の困難は一通りでなかつた、自分の扱方の悪いのと手順れた先生に別れ新しい者が來

たと云ふので子供は内と云はず外と云はず日々あばれ廻つた、男兒等は喧嘩をした。「この喧嘩に付きて自分の常に考へて居る事は一般には云はれないが喧嘩も子供の喧嘩ならば時としては餘り干涉せず子供仲間の解決に任せて置かねばならぬと云ふ事である、なせなれば子供の時に互に人に勝たう權力を人の上に及ぼさうとする心が喧嘩になるのであるから喧嘩をする位の者でなければ成長の後も優勝の人正義を守る人となる事出來ぬ」以上の様な考へから喧嘩は餘り氣にもならなかつたが、しかし其の頃の子供の喧嘩は餘り樂觀も出來ない様な時であつたので、そんな時にはかなり氣をもんだ、しかし氣のもみ甲斐のない時が度々であつた、又子供は快活で無邪氣で、すなほであると思つて居つたが意地悪や、はにかみ性や、ひがみ性、いじけ性等をばつ／＼に見出した、親切、きれい、ずき等のよい點も見出した。自分はいつとも子供に對してよい感情計りを持ちたい、教生時代にはかなり亂暴剛情不柔順、殘忍性を帯びた様な者もあつたが後はすつかり其の様な事を子供から除いてよい事計りが自分の心に深くきざまれて居つたので尙々強く感じたのである、自分は女

學校時代から小公子が大好きで度々反復した結果もあるのであらう。兎に角幼児の性情を極狭く／＼縮めて考へて居つたのである。しかし自分の受持である子供に餘り面白くない性情を見出したとすれば其のまゝに置くわけにも行かぬ、如何にして其の性を矯正し様かと随分苦心したが経験の無い自分が幼児の個性を充分に觀察もしないで手をつける事を恐れた、で自分は幼児に接する態度、心的状態、言語等に就て深く考へた。幼児に接するの態度は極力幼児等を愛し常に愛の過ぎざる様にと注意した、心的状態は燥いた涸れた、かさ／＼した心持をとりさつて常にうはほひあり且熱あり感情圓滿常に小犬が跳り小鳥が歌ふ様な心地になつて幼児に接した。言語は「いけない」と云ふ様な否定的の言葉は決して使用しなかつた。こんなにして自分は朝は可成早く登園し幼児を迎へ出來得る限り幼児と共に遊んだ。同じ事を繰返すことゝに六ヶ月續いた。時は大正三年二月となつた。自分は餘程子供になれて來た、さきに慈愛深い先生に別れた寂しさは幼児の上に餘り見られなくなつたと同時に幼児の心情も餘程和らいで來た。わけも餘程わかる様になつて來た。今迄「如何

し様かこの子供を」とねてもさめても心にかゝつて居た子供も善惡を辨別して同じ戯も大した悪戯ではなくなつて來た。「ひねくれた」子供も其の心情はどこへやら失せ去つて卒直な愛らしい子供となつて來た。自分の喜びは何にたさへんものもない位であつた、でも決して安心は出來ない益々腕によりをかけた。大正三年三月末日幼児達は立派な保育證書を頂き且日頃造つた手技を貼りつけた手技帖、畫き方帖等をもらつて、にこ／＼して保護者と共に園門を出ていつた、自分は幼児等の前途に幸多かれと祈りつつ見送つた。

特別悪戯兒の矯正について

大正三年四月自分は年長と云ふ處から一番下の組満四歳から入園の組の受持を命せられた。此度は子供に少し経験も出來たので「此度こそは」と大希望を持って幼児等を迎へた、幼児は二十五名、皆乳の香のぬけない者計りであつた。或人は「子供は注意して放任して育てるに限る」たしかルーソーもそんなことを云つたと記憶してゐる、で家庭と幼稚園、幼児にとつては大變化であるかもしれぬ、たしかに大變化であるから本學年度は以上の如き言葉に従つて取

扱つて行かうと思つたのである。そうして自分はどんな苦しい事、かなしい事、腹立たしい事があつても幼児に接する時は心閑靜に、快活な態度で接してやらう（横路にはいるが世の中の母親の子供に接して居る状態を見るに、かなり物のわかつた人でも自分の感情によつて子供を左右して居る、自分が腹立たしい事があれば些少たる事にも子供をしかり飛ばす、苦しみ悲しみあれば幼児が楽しくうれしく話しても少しも相手になつてやらない、「ヤカマシイ」とか「ウルサイ」とか云つて少しも意にしない、そうかど云つて自分の氣分のよい時は子供が進まなくとも無理にもひきよせて子供にとりては面白くもない事を話してみたり又はしてみたり等する實に幼児にとりては迷惑千萬な事であつてこんな心掛けでは、とても完全な家庭教育を施して行く事は出来ない）又母の代りと云ふ事を念頭から放棄しない様にし様、そして昨年來考へた心情等は決して忘れない様にぞ、こんな事を思つて幼児に接した。幼児の登園前から出勤して玄關前に幼児を迎へた、二三日は其れづつ附添があつたので事もなく打過ぎた、日の經るまゝにぼつ／＼附添を離さうとした。すなほに附添をは

なれる者もあるが、又なか／＼離れない者もある、肩にも兩手にも、兩袖にも子供がついて居るが中にはどうしても祖母の側をはなれぬもの、女中を離さない者が二三名はあつた、いろ／＼骨を折つた結果一二ヶ月の後には附添がそばに足らなくとも泣かない迄になつた。他の元氣な幼児の状態はと云ふに幼稚園にはなれて來たが、實に亂暴で手のつけられないのがあつた、この幼児は祖父母の溺受を受けて成長し、實に我と云ふ事より考へた事が無い、とても共同生活なんか出來さうにもなかつた、園内の玩具は何れも自分の持物にしたい、自分の云ひ出した事は是が非でも通したい、腹の立つた時は、行きあたりばつたり附近の幼児の頭をなぐる、泣かす、机の上を歩く、机や椅子を倒す、石を投げる、こんな事で他の幼児の迷惑は一通りでない。自分は靜かに考へた、又よく觀察した、して先づ試みた、他の子供は暫く助手の方に預ける事とした、自分はこの幼児の登園するや直ちに手をとつて友達一人を連れ花壇に遊び蛤蜻を採り蝶を追つた、又時には裏の小池に小舟を浮べ笹舟をつくり小魚を抄つた、又時には木蔭に連れて行きて談話會を開き鬼事を遊び、木登を

させたり等した。事情の許す限りは公園にも連れていつた、あの廣々した緑したゝる樹蔭にて自由に活動せしめた、初めの程は友人も一人であつたが時々は二人三人又五人計りにも増加した、しかし五人七人と友人を増加する事が出来る様になつた頃は餘程共同生活に馴れて來た時であつた、かくて一學期を打過した。第二學期から本幼児は見違ふ計りに元氣なよい子になつた、自分の喜びは何にたごへんものもなかつた、自分は益々幼児の個性を尊重し

明治天皇の御製 (子) 思ふ事つくらふ事もまだ知らぬ幼な心の美しきかな。こんな有難い御製を思ひうかべ無邪氣で、のび／＼して、元氣で、快活な、子供らしい子供に仕立てゝ行かうと腐心した。

盜癖兒を矯正した事

大正七年四月又新らしく二十五名の幼児を迎へた。或雜誌で以下の様な事を讀んだ大變自分の氣に入つて自分も常にかく考へて居るので一寸記して見よう(幼稚園の參觀に罷出で候、父兄や母姊や、視學や、校長に成績品として御目にかくる一番適當なるものは「御出で下さつたら皆さん私共はこの可愛い子供達といつとも一緒にこんな面白く遊び廻つて居

ります」と敢て鼓言し得る事にて候、諸君の態度にして斯くあらば子供は常に太陽に照つて居るが如く又花の愛らしく笑つて居るが如く愉快に、陽氣に樂しむ可く候、遊戯をして樂しきものたらしむると同時に有益なるものたらしむるを得るも得ざるも先づ以て諸君の元氣の有無と陽氣なる態度を維持する否とによつて直ちに判明致候、幼稚園に於て不景氣なる態度を現はすは絶対禁物に御座候)以上の様な心持は幼児を取扱ふ者には必要缺くべからざる處である。

大正七年入園した子供の中今迄經驗した事のない盜癖兒を見出したのである。立派な家庭の娘子、一日も早くこの癖を矯正しなければならん、子供に傷けない様、他の子供から目星を付けられない様、子供自身にもいやな思をさせない様、父母にも知らせない様にして矯正にとりかゝらうとした、先づ自分は目に立たぬ様に其の子供の登園するや退園する迄少しも目をはなさないで行動に注意した。時には多くの摺み紙を懐中に見た、又排べ方用具を「ポケット」に入れ又袂のふくらんだ時もあつた。こんな時にはいつも友人無き時を見計らつて本幼児の手をとり花

壇又は芝生に連れ行き、靜かに、懷の摺み紙を先生に下さい、又ポケットの板や鑲を先生に出して下さい、こんな事を五六回も續けた。同じ方法では幼児もいやに思ふと考へ幾分の變化は與へたが、しかし本幼兒の持物も出せた事は同一であつた。かくしてゐる中に色々無邪氣な話しもしてやつた、元氣な話しもした、又自分の持物で無い物を人知れず自分の物にするの不可なるを話し等した。初めの中は少しはにかむ點等ないでもなかつたがよい家庭のお子さ
んだけに、餘りの隠しだてをしたり、こちらから云ひ出したものを出さなかつたりと云ふ様な事はなかつた。かく度重ねるにつれ幼兒ながらも人知れず隠すものゝやはり人は知つて居ると思つたのか、子供ながら其の否を悟つたのか、ぼつ／＼其の度を減じ約三ヶ月の後は全く其の跡をたつた。此の間自分は、こわい顔をした事もない、叱つた事もない常よりも注意して出來得る限りやさしく接した、以後よく注意して居つたが其の後は決してかゝる事はなかつた自分は本幼兒のこの癖を根治した事を衷心うれしくも思ひ又感謝もした。いま／＼でこの幼兒は何となく、いぢけた、はき／＼せぬ子供であつたが、この性の根治

してからは快活なさつぱりしたよい子供となつた。

虚弱兒を健康兒に

大正九年四月又々新しい幼兒二十五名を迎へた、本年から養生科が出來たので其の生徒二名と共に幼兒に接する事となつた。本年度入園の幼兒は一見身體の瘦せた弱さうな幼兒が多かつたので一層幼兒の身體的方面に對して注意を拂つた。大自然との接觸は益々其の度を多くした。初めの程は幼稚園裏手の公園に引率するにもなかく／＼に困難であつた。

幼稚園に入園の出來る年齢の幼兒が三町計りの道も歩けぬ云ふ様な事は大人からはとても考へられぬかもしれない、まして幼稚園に入園の出來得るものごと……

しかし實際は南園堂(約三町)行きにも附添の肩を要した。オンブ／＼が口癖の様であつた。かくて約一ヶ月の後は附添の肩を要せず約五町計りなる師範學校前位迄は歩ける様になつた。一日一同を引率して物産陳列場前に猿の子、鶴の子を觀察に出かけた、行きは先づ無事であつたが俄に「先生鶴の脊中に乗りたい、鹿の脊中に乗りたい」等云ひ出して動かす、色々すかしてもなだめても動かすキャラメル三四

個を與へ附添の來るのを待ち其の肩によつて漸く歸園した。この幼兒は生來薄弱な質で家庭でも保護に保護を加へ幼稚園に入園する迄は全く眞綿の中に包まれて居つた。身體的方面に於ける積極的取扱等は、てんで受けて居らなんだ。在園二ケ年間常に家庭と連絡をとり本幼兒の健康の増進に全力を注いだ。こんなにして注意した結果入園第二年目には他の幼兒に餘り劣る處なく若草山にもどん／＼登つた、田園にもすん／＼出掛た、春日山附近にも自由に遊び、僅かの時間で春日神社にも詣で少しも疲勞せず、郊外に出る事を此上もなく樂しむ様になつた。少し程度は違ふが他にも二三同様の幼兒にもあつたが皆健康體となつて大正十一年三月に一同目出度小學校に入學した。考へるに子供の育て方は勿論消極的ではない、現今は尙更自ら働き得る人間としなければならぬのであるから常に積極的方面を考へて行かなければならぬ、しかし其の幼兒々々に適當なる方法を使用して生れつき弱い者は普通健康兒とは衣食住其の他すべて幼兒の取扱上手ごゝろを變へて行かねばならぬ。

幼兒の躡け方に付て

とやかくして居る中に十ケ年は夢の間に打過ぎてしまつた。其の間かなり澤山の子供に接した。一番強く感じた事は、善良なる習慣の養生は母の胎内にある中から初めなければならぬ事だと思つた。少なくとも生後直ちに初めなければならぬ。赤ん坊だからよい、小さいからよい、と云つて居る中に手のつけ様も無い迄になつてしまふのである。家庭教育の最も進んで居る英國等では、母親は紳士淑女と云ふ事に重きに置き正直でなければならぬとか、弱者を扶けなければならぬとか、親切でなければならぬとか、蔭日向があつては不可ないとか云ふ事を策度我國に於ける古武士の様に形の上にも、精神の上にもちやんと堅く守つてゐる。そして子供を教育して行く。我國の母親達は育児に對する眞の考はまだまだ幼稚である。幼兒四歳五歳にもなり亂暴、剛情、不柔順、意地悪、殘忍性、反抗性、いじけ性、はにかみ性、ひがみ性等を現はして來た時に初めて如何し様か、何ぞかねせばならぬ、これでは困ると大騒ぎをする。しかし其頃に驚くのはもう遅い、そして四五歳にもなればこれを矯正するのに餘程の骨折である、親も苦しい、子供も苦しい、そして割合に效果

はうすい、生後よく注意して不知不識の間にこれ等の悪癖を矯正して行かなければならん、これをするのに最も必要な事は、自分の子供をよく知る云ふ事である、自分の子供をよく知らないでは眞の教育は出来ない、世の母親たる者は充分に智徳を磨きわが子に對して溺愛する事なく、よく子供を理解して大人の標準を以てせず、子供の各年齢に應じ、時代に從つて最も子供らしく、子供として必要なる心身の活動を圓滿ならしめ、之に依つて自然の發育を完うせしむるのである。

子供と小遣ひ

これも常に母親から困る一つとして聞く處である「子供が小遣をつかつて困る」と（或人の意見による）餘りに他の子供と異なる如く嚴禁すれば却て悪しき感情卑し心情を起すに至る事がある、其で時々は與へ駄菓子等を買はしむるもよい、されど決して立食させてはいけない、買へば必ず家に持ち裝つて食べさせる様にする、而して小遣帳をつくり出納を明にして置く。斯くして成長するに従ひ金銭出納簿に益々明細に學校用品其の他の服裝を始め日用品萬般悉く記入せしめ子供にあり勝ちな物欲しさの卑劣な

心を起さしめず一方には濫費濫用を戒しめつゝ偏せず曲らず窮せず怠らせずする内に自然と經濟的思想を養ふ様に勉めたいものである」と。自分も小學校の上級にでもなればこの説には贊成しないでもないが、幼稚園時代や其れ以前には子供に小遣を與ふと云ふ事は絶対に反對したのである、これも癖の者で幼少より金銭を與ふる事を教へず、又買食等の癖をつけなかつたら決して子供がそう錢ほし、錢ほしと云ふものでないと云ふ事を經驗によつて自分は斷言するのである。未だ何もわからぬ子供に金銭を與へても徒に亂費の方法を教へる様なもので決してよい結果は來さないのである「友達が、近所の子供が買食をするので」と云ふ事はよく聞く處であるが大人が確固たる意見を持ち、最初の第一歩に於て注意したならば決して錢遣ひの習慣等はつくものでない。以上わが過去十ヶ年の懺悔である。